

## 北青葉山分館所蔵「理科大学コレクション」(仮称) について - A Collection of the College of Science of Tohoku Imperial University, called tentatively in Kita-Aobayama Library -

著者	小川 知幸
雑誌名	東北大学附属図書館調査研究室年報
号	8
ページ	15-28
発行年	2021-04-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00131559">http://hdl.handle.net/10097/00131559</a>

## [調査研究]

## 北青葉山分館所蔵「理科大学コレクション」(仮称)について

— A Collection of the College of Science of Tohoku Imperial University,  
called tentatively in Kita-Aobayama Library —

小川 知幸

## 1. はじめに

東北大学附属図書館北青葉山分館は青葉山へのキャンパス拡張に伴い理葉分館構想のもと1985年(昭和60)に竣工した、本学では比較的新しい図書館である(写真1)。だが、その蔵書は、それまで片平キャンパスにあった理学部各学科図書室・中央図書室に収蔵されていた図書資料を移管し集中させたことで、少なくともその一部の歴史は1911年(明治44)の東北帝国大学理科大学の創設にまで遡る<sup>1</sup>。

2018年(平成30)11月には、理科大学の初代教授らにより購入されたと考えられるガリレオやニュートン、ホイヘンスなどの著書を活用し、総合学術博物館と北青葉山分館の連携企画として、「黎明の自然科学」展を理学部自然史標本館にて開催した(写真2)<sup>2</sup>。また、これに先行して8月には職員研修の一環で、同分館の16世紀から18世紀までの蔵書を利用し、「ヨーロッパの写本と古刊本の発展」と題した連続講義をおこなった。講師は現在も本館の西洋古典資料を中心に調査研究をすすめている只野俊裕・協力研究員および筆者であった。さらに、2019年(令和元)11月にチャールズ・ダーウィン生誕210年記念として東北大学附属図書館企画展「進化×深化 蔵書でたどる『種の起源』への道のり」を本館において開催したことは記憶に新しいが、そこに北青葉山分館所蔵の多数の図書が出陳されていたことを知る者は少ないのではないだろうか。

展示準備中には同分館からイギリスの生物学者リチャード・オーウェン(Richard Owen, 1804 - 1892)自筆の献呈本(ダーウィンの編著書)が再発見さ



写真1. 附属図書館北青葉山分館

れ、12月にひらかれた貴重図書等委員会において本館の貴重図書に指定された<sup>3</sup>。

このように、北青葉山分館では、とくに貴重性の高い洋書古刊本が相当な分量で集められていることが予想されていた<sup>4</sup>。

一方、本館では貴重書庫に続いて準貴重書庫の改修と運用が始まり、そのような趨勢のなかで、2020年(令和2)3月に北青葉山分館管理係長より同分館所蔵の図書資料の一部を保存環境の整った本館に移管したいとの申し出があった。そこで筆者は、三角太郎・情報サービス課長および菊地良直・貴重書係長とともに同分館の環境および対象となりそうな図書資料を視察し、本館において推進されている古典資料の集積・一括排架の計画と足並みを揃えて1850年までの刊行資料を基準としてはどうかと提案した。

1 「第六章 北青葉山分館」東北大学百年史編集委員会『東北大学百年史 四 部局史 一』東北大学、2004年、138 - 148頁。北青葉山分館の名称は新館竣工前の1982年(昭和57)よりあたえられ、おもに理学部化学棟を拠点として業務を遂行した。新館着工は1984年3月、竣工まで約1年、総工費は5億3千600万円であった。『東北大学附属図書館報 木這子』Vol. 10, No. 4 (1986), 6 - 9頁参照。  
2 北青葉山分館・自然史標本館連携展示企画書(2018年8月)参照。展示は本館での平成30年度東北大学附属図書館企画展

「西洋古典への扉—The Door into Old and Rare Books—」にあわせて11月に、一部は東北大学ホームカミングデーにあわせて9月にもおこなった。

3 小川知幸「東北大学附属図書館で発見されたオーウェン自筆本について」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第7号、1 - 11頁

4 小川知幸「ガリレイ『天文対話』との出会い—北青葉山分館特別閲覧室」『木這子』Vol. 29, No. 4 (2005), 7 - 11頁



写真2.「黎明の自然科学」ポスター

その結果、緊急事態宣言解除後の同年5月末までに、OPACに登録されていた図書資料のうち、刊行年不明のものを含めて、おもに2階集密書架上に排架されていた図書資料が候補として抽出された(写真3)。すなわち、数学、物理、化学、地質、生物、天文の各教室旧蔵書<sup>5</sup>、そして科学概論、集密二次資料、同大型本・図書他からの計359冊であった。筆者はそれらを実見し、同月から断続的に11月までの約半年間にわたって年代確定作業をすすめる、最終的に290冊を候補として選出した。ただし、この数字は暫定値であり今後の基準の見直し等によっても変更されうる。

これに併行して本館に移管(配置換え)するさいの取り扱いが協議された。

情報サービス課からの提案としては、まず第1、第2フェイズに大別し、第1フェイズには「理科大学コレクション」のような「箱」(カテゴリー)を設定して、①刊行年代、②資料的価値、③科学史的価値、④東北大学としての価値などの基準に照らして調査と整理をすすめる、本館準貴重書への指定をめざす。そして第2フェイズでは第1フェイズで明確化した基準に沿って、それ以外の図書資料もこのコレクションに追加する、と

いうものであった。

①刊行年代については、おもに保存上の観点から1850年をいちおうの基準としたことは上記の通りである。また、②資料的価値にはさまざまな観点がありうる。著書の稀少性、装丁やその他の物理的特徴、出版形態、また、書き入れ、添付資料などである。そしてこれと分かちがたく結びついているのが③科学史的価値であり、その意味では一定の体系性をもったコレクションでなければならない。これは、「理科大学コレクション」と名付けるにあたってそれに相応しいかどうかという判断の根拠ともなるだろう。さらに、④東北大学としての価値についても、大学史や東北帝国大学理科大学のスタートメンバーとの関係から追究するとすれば、多様な観点から③とも連動する。

したがって、第1フェイズではこの290冊の全体の傾向を析出し、そのイメージを共有しながら暫定的な基準を作成することが重要となるだろう。つぎに、第2フェイズではこの基準に従って「理科大学コレクション」をそのようなものとして、現在だけでなく将来にわたって時間をかけて育成・発展させねばならない。

本稿では、この第1フェイズにおける選定基準を明確化するために、①②③④のそれぞれの観点に照らして、これまでに分析・判明したことを提示する。名称を含め、同コレクションについての判断材料とされたい。

なお、北青葉山分館ではこれとは別に、開館当初から物理学研究室の一部蔵書が「貴重書」として特別閲覧室に排架されており、それらが現在217冊ある。また、そのつど別置された図書が4冊あり、計221冊が同室

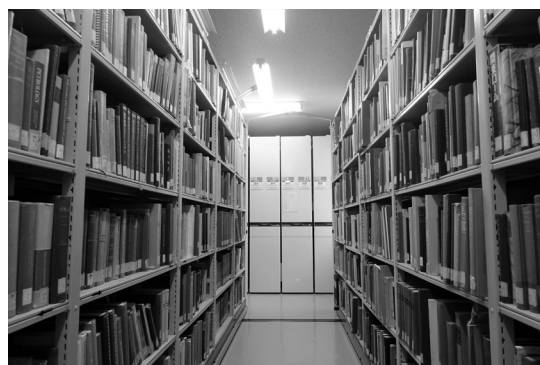


写真3. 集密書架の研究室旧蔵書

5 北青葉山分館竣工にあたり、「旧学科蔵書については各学科の資料の特殊性および分類法の違いから、資料群のまま配架する方法を採った」(上掲書「第六章 北青葉山分館」, 145頁)。

それらがそのまま現在では2階の電動集密書架上に収蔵されているということである。

におかれている<sup>6</sup>。本稿の分析対象は5月に館内の排架図書から抽出された290冊のみであるが、「理科大学コレクション」は、この両方を含めた構想だということである。

## 2. 全体の傾向——19世紀書から18世紀書へ

さて、1850年を基準としたのは主として図書の支持体や装丁などの材質による保存上の理由からであったのは言うまでもない。この年代に前後して木材パルプ紙がそれまでの手漉き紙に取って代わり、それ以後、紙の大量生産が始まったことはよく知られる通りである。ただし、それによって出版数が増加し、それ以前の出版物は相対的に稀少であるという一般的な傾向とも関係している。

しかし、1850年までとそれ以後とで機械的に取捨選択するのではなく、シリーズや科学史上著名な人物にかかわるもの、ノートなどの特殊な形態、また、書き入れや蔵書票、書簡等の添付資料があるものなどは、1850年以後の図書資料であっても候補としてそのまま残した。

各旧蔵教室等における冊数は、抽出した書架別に、数学7、物理21、化学8、地質61、生物98、天文31、科学概論3、集密二次資料20、同大型本38、同図書2冊の計290冊であった(和書については冊数にかかわらず1帙を1冊と算定)(表1)。

これをグラフにすると図1のようになる。

数学、物理、化学、地質は1911年(明治44)の東北帝国大学理科大学創設時の4教室である<sup>7</sup>。このうち、地質学教室の旧蔵書から抽出された図書資料が比較的多く、また、その後1922年(大正11)に設置された生物学教室が冊数において最大であることがわかる。

表1. 各旧蔵教室等における冊数

旧蔵教室等	冊数
数学	7
物理	21
化学	8
地質	61
生物	98
天文	31
科学概論	3
集密二次資料	20
集密大型本	38
集密図書	2
計	290

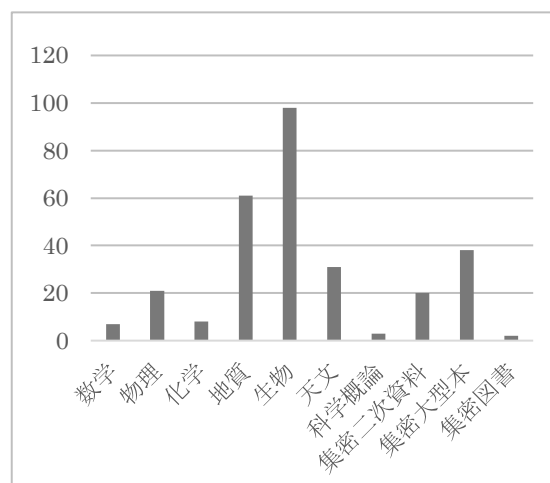


図1. 各旧蔵教室等における冊数

ただし、一方で物理学教室の旧蔵書は、特別閲覧室の上記「貴重書」に分有されていることが推定されるため、じつはこちらが最大になるのかもしれない。また、大型本には各教室の旧蔵書が混排されているだろ

6 上掲書「第六章 北青葉山分館」には、「物理教室ではルネサンス時代の出版物を含む科学史上貴重な資料の収集……も行われた」(139頁)「また、物理学科図書室所蔵のルネサンス時代の出版物を含む『貴重書』等は一括して特別閲覧室に収められた」(143頁)との記述がある。たしかに、2018年の職員向け連続講義ではとくにこの「貴重書」を活用したことから、③科学史的価値についてはここから大いに期待できる。また、「ルネサンス時代」という表現には、一般的にその時間的広がりや14世紀から16世紀半ばまでとすれば違和感があるが、おそらくギルバートの『磁石論』(ロンドン、1600年刊)やガリレオ・ガリレイの『天文対話』(ロンドン、1663年刊)のような蔵書を指しているのだろう。他にも、特別閲覧室にある科

学史上の古典としては、ベーコンの『風其自然誌』(アムステルダム、1662年刊)、ホイヘンスの『宇宙を観る人』(ロンドン、1698年刊)、ニュートンの『全集』(ロンドン、1779-1785年刊)などを挙げるができる。

7 地質学教室(地質学科)は1911年(明治44)に3講座制で設置されたが初代教授の矢部長克の帰国が遅れたため、翌1912年(大正元)になってようやく開講した。1921年(大正10)には3講座のうち地質学古生物学と岩石鉱床鉱物学に分離、翌1922年に4講座にシフトして地質学・古生物学、岩石鉱物学・鉱床学となった。また、天文学教室は1934年(昭和9)に設置された。



うから、単純にここでの数値から教室別の傾向を読み取ることは難しいが、このコレクションにおいて数的優位にあるのは、ひとまず地質学と生物学教室、そしておそらくは物理学教室であるといえる。

ところで、数学教室の旧蔵書が7冊ときわめて少ないのはなぜだろうか。『東北大学百年史』にはつぎのようにある。「数学教室では十八世紀以前の数学書、和算関係資料（後に本館の保存するところとなった）を集め、戦前東洋第一の評を受けた」<sup>8</sup>。すなわち、その蔵書のうち和算関係資料については、すでに本館に移管されていたという。本館の特殊文庫のなかには和算関係文庫と称されるものがあり、これは複数の文庫・集書を合成したもののだが、18,335冊の規模があり、その成立は1979年（昭和54）とされる<sup>9</sup>。とすれば、北青葉山分館の竣工直前には本館に移管されており、同分館には当初から収蔵されなかったのであろう。さらに、『新訂貴重書目録洋書篇』に記載されているエウクレイデスの『幾何学原論』（1482年刊）は、本学のただ一つのインキュナブラ（揺籃期本）であり、1998年（平成10）に理学部数学科より本館に移管されたことが知られている<sup>10</sup>。要するに、数学教室の旧蔵書のうち貴重性の高いものはその大半がすでに本館に所蔵されているのである<sup>11</sup>。

つぎに、全体を図書資料の刊行年によって分類すると、図2のようになる。

刊行年のうちもっとも早いものは1727年であり、これに1737年、1741年、1751年（2冊）、1752年刊……と続き、18世紀（1800年まで）の図書資料は計23冊である。むろんそれ以外は19世紀のものである。また、1850年以後であっても計27冊を候補として残している。もっとも遅い刊行年は1893年であった。ボリュームゾーンは1820年から1850年までにあり、選定方法からして当然のようだが1840年代が最大値（106冊）となっている。

この結果に照らせば、東北帝国大学理科大学の創設（1911年）から遡ること約60年から約90年、早いものでは約180年前の刊年の図書資料を購入していたといえる。

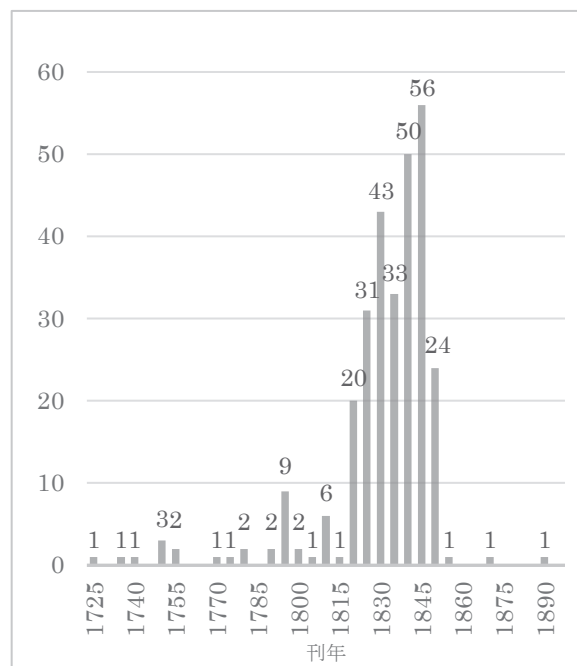


図2. 刊行年と冊数（5年毎のスパン）

したがって、決して最新の研究成果のみを追究しようとしたのではないことは明らかである。

それでは、これらの図書資料が図書館に受け入れられ登録番号を付与されたのは、いずれの期間であったか。図3を作成した。

なんと言ってもまず目を引くのは、1945年（昭和20）以降の受入れが計46冊あることであろう。東北帝国大学は1947年に東北大学に改称し、1949年には学制改革に伴い新制東北大学へと改組される。ごく一部の図書資料では改装などにより受入れの押印がうしなわれており、すべての年代が判明しているわけではないが、それにしても全体の約6分の1以上（約20パーセント）が戦後20年近くのあいだに、とくに1960年代前半に購入されていたことには留意せねばならない。

一方で、戦前の傾向を読み取れば、理科大学創設時の購入分が56冊と群を抜いている。その後1917年（大正6）に小さな山があり、つぎに1922年（大正11）から1929年（昭和4）までが大きな山になっている。この年代から気づくように、そこは地質学教室において

8 上掲書「第六章 北青葉山分館」139頁

9 小川知幸「東北帝国大学附属図書館の蔵書形成」『図書館文化史研究』第35号、2018年、101－104頁の表1を参照。

10 小川知幸「貴重図書の追加分について」東北大学附属図書館所蔵『新訂貴重書目録洋書篇』東北大学附属図書館、2004年、17－22頁を参照。

11 一方、化学教室では「『建物は何時でもできるが学術雑誌の整備は短日月にはできない』として、学術雑誌の収集に務めた」（原文ママ）と、上掲書「第六章 北青葉山分館」139頁にある。最新論文を遺漏なく収集しようとしていたとすれば、20世紀への変わり目あたりからそれ以降の刊行物が主軸であったとおもわれる。

地質学古生物学および岩石鉱床鉱物学への拡充がなされ、また、上述のように生物学教室が設置された時期でもあった。いわば第二の教室誕生ブームである。このような体制変化と冊数増加が連動しているようにみえることは大変興味深い。敢えて言えば、このような傾向は東北大学帝国大学附属図書館全体の蔵書の増加傾向とも軌を一にするようにおもわれる。その頃、日本国内では第一次大戦による大戦特需を受けてインフレーションがすすみ、大学予算が増額され、他方、海外ではドイツ・マルクの暴落等によって洋書が入手しやすくなっていた<sup>12</sup>。

いずれにしても、56冊(約20パーセント)が創設時

に、続いて太平洋戦争終結までに173冊(約60パーセント)と、あわせて約80パーセントが戦前の購入分であった。しかしながら、1919年(大正8)に理科大学(College of Science)は理学部(Faculty of Science)となり、学部制に移行している。上記教室誕生ブームの直前である。であれば、理科大学の創設とつぎに理学部への改組という事象が、これらの図書資料の購入にプラスの影響をあたえたともいえそうである<sup>13</sup>。また、一方で、その後ようやく1960年代前半になって再び18・19世紀の刊行物を購入する機会が巡ってきたということでもある。

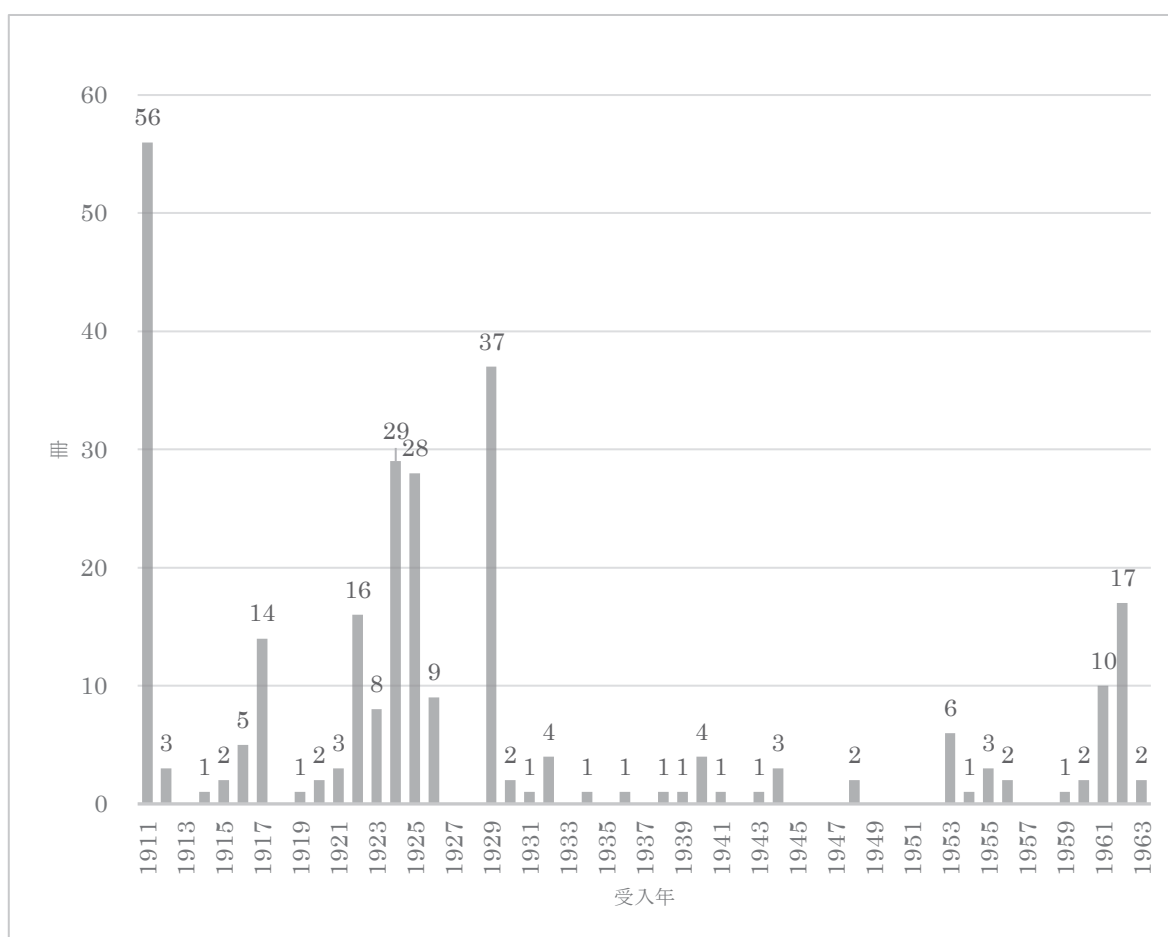


図3. 受入年と冊数

12 小川, 上掲論文「東北帝国大学附属図書館の蔵書形成」とくに75 - 82頁を参照。

13 とすれば、「理科大学(理学部)コレクション」あるいは、新

制大学における理学部と紛らわしければ、「東北帝国大学理科大学/理学部コレクション」という名称も考えられるだろう。

ところで、いつ、どの刊年の図書資料が購入されたのだろうか。この分析により、どのような種類の研究資料がどの時点で求められていたのかを探ることができはるはずである。以下に、作成した表2を掲げる。

受入年については便宜上5年毎に分け、その期間に登録された図書資料の刊年を年代の下に昇順にならべた。2冊以上の場合、刊年の後ろの( )内にその冊数を示した。また、18世紀にかかる刊年には薄く着色した。

ここから読み取れるのは、理科大学創設時から1920年代前半まではとくに1820年代以降の刊行物を満遍なく購入しており、その後、1925年以降になって、にわかにはそれらよりも早い年代の刊行物の購入へと全体的

にシフトしたように見えることである。左上の1825年の著書は、1912年に数学教室において登録されており、これはドイツの数学者カール・グスタフ・ヤコブ・ヤコビ(Carl Gustav Jacob Jacobi, 1804 – 1851)の学位論文『部分分数解析』であった<sup>14</sup>。地質学教室では1911年に購入した1834年の刊本がもっとも早いものの一つで、フランス博物学の権威ジョルジュ・キュヴィエ(Georges Cuvier, 1769 – 1832)の『骨化石研究』(10巻+図版2巻)である<sup>15</sup>。一方、1925年に登録された1752年刊の図書は、ハレー彗星の名で知られるエドモンド・ハリー(Edmund Halley, 1656 – 1742)著『天測暦と運行則』であり、天文学教室の購入分である<sup>16</sup>。

表2. 刊年と受入年(5年毎のスパン)

受入年	1910-	1915-	1920-	1925-	1930-	1935-	1940-	1945-	1950-	1955-	1960-	1965-	1970-
刊	1825	1812 (4)	1822	1752	1840	1821	1727	1758	1737	1792	1755		1751
	1829	1814	1825	1781	1841	1845	1741	1838	1829	1826 (2)	1784		
	1829	1826	1826	1804	1842	1849	1774		1830	1831	1797 (9)		
	1834 (12)	1830	1827 (2)	1818	1843		1775		1831	1833	1810		
	1836	1831	1828	1822	1844 (2)		1802		1833	1847	1825 (5)		
	1837 (2)	1833 (4)	1830 (2)	1824 (17)	1846		1833		1845		1827		
	1838 (2)	1837	1831	1825 (2)	1853		1835		1847		1828		
	1839 (7)	1839 (2)	1832	1827			1837				1829		
	1840	1845	1833 (11)	1828 (3)							1831		
	1841 (2)	1847 (5)	1836	1829 (5)							1838 (8)		
	1842	1850	1840	1830							1840 (2)		
	1843 (8)		1842	1831									
	1844		1843 (2)	1834									
	1845 (2)		1844	1836									
	1846 (4)		1845 (5)	1838									
	1847 (2)		1846 (7)	1839 (2)									
	1848		1847 (4)	1840 (2)									
	1849 (2)		1848	1842 (4)									
	1850		1849	1843 (2)									
	1851		1850 (5)	1844 (10)									
	1852 (2)		1851 (3)	1845 (4)									
	1853 (2)		1852	1846 (2)									
	1854		1853 (2)	1847 (2)									
	1855		1854 (2)	1849 (6)									
年	1893			1850									
				1873									

14 Carolus Gustavus Jacobus Jacobi, Disquisitiones analyticae de fractionibus simplicibus, Berolini, 1825. 請求記号 J/2 受入 1912/11/19 登録番号 901

15 Georges Cuvier, Recherches sur les ossemens fossiles, où l'on rétablit les caractères de plusieurs animaux dont les révolutions du globe ont détruit les espèces, 4e ed., Paris, 1834. 請求記号 C/34 – C/44 受入

1911/8/3 登録番号 6128 – 6138

16 Edmund Halley, Astronomical tables with precepts: both in English and Latin, for computing places of the sun, moon, planets, and comets, London, MDCCCLII [1752]. 請求記号 H/A/8 受入 1925/7/22 登録番号 44338

1930年代以降も、およそ1850年代より前の刊行物の購入は、少なくとも続いたといえ途切れることなく続き、1940年以降、すなわち戦中・戦後に18世紀書がさかんに購入されている。今回の対象となる図書資料のうちでもっとも早い1727年刊の図書は1944年に登録されており、具体的にはイギリスの生理学者スティーヴン・ヘールズ(Stephen Hales, 1677 - 1761)の主著『植物の静力学』である。予想されるとおり、生物学教室の購入分であった<sup>17</sup>。

このように、戦中・戦後には、より早い刊年の図書資料が集められるようになり、いわば古典への傾倒ともいえるような傾向が見られる。これをどのように解釈すればよいだろうか。

推察するに、理科大学創設にあたって購入したものは、研究のいわば基礎設備となる図書資料であり、広い意味での教科書となるスタンダードなものであった。その登録の早さから考えれば、欧州外遊中に現地で直接買い求め、荷造りして日本へと送付したものではなかっただろうか。とくに、地質学教室の初代教授・矢部長克(やべひさかつ)は、1911年にはまだ帰朝していなかった。約10年後に学部制に移行し、1920年代の教室誕生ブームが起きると、その基礎部分が増築され、さらに、研究の進展から、その基礎を形づくっている古典的な著作へと徐々に関心が移った。1930年代前半からは、五・一五事件(1932年)や国際連盟脱退(1933年)、二・二六事件(1936年)など、軍国主義的な世相を反映した出来事からもわかるように、諸外国との関係は悪化する。洋書の購入はもとより、西洋の諸学問に、実学以外で携わることそのものが厳しい目で見られたのではなかったか<sup>18</sup>。

しかしながら、図書資料の購入は継続し、終戦間際から戦後にかけて、18世紀書の購入がさかんとなる。その場合いったいどのような購入ルートが開いていたのか。個別の資料にあたることなしには究明できないが、本稿の範囲をこえるため他日を期したい。

いずれにしても、「理科大学コレクション」は小さなコレクションであるとはいえ、このような分析により理科大学のスタートメンバーの動向や東北大学史の一端をうかがい知る可能性に満ちたものであることは確かであろう(④東北大学としての価値)。

### 3. 著者とタイトル——研究の基礎設備として

さて、それではこのコレクションには科学史上著名な人物による、またはその名にかかわるどのような著作が含まれているのだろうか(③科学的価値)。表3を作成した。

ここでは、各旧蔵教室等別に、著名な研究者とそれにかかわる図書資料の刊年を示した。同じ刊年に複数冊があるときは( )内に冊数を、また、著者の名が教室をまたがって現れる場合にはこれを薄く着色した。

同じ刊年に複数冊あるものは大抵シリーズと見做してよい。冊数で見ればスイスの植物学者ドゥ・カンドール(Augustin Pyramus de Candolle, 1778 - 1841)が最大であり、これにスウェーデンの博物学者リンネ(Carl von Linné, 1707 - 1778)の、そして、浩瀚な『一般と個別の博物誌』の著者として知られるフランスの博物学者ビュフォン(Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707 - 1788)の名が続く。動植物の総合的な、そして一種文学的な記述をめざしたビュフォンに対し、生物分類の体系化をめざして二名法を確立したリンネは、いずれも紛うことなき大家であるが、その業績についてはすでに触れたことがあるのでそちらに譲りたい<sup>19</sup>。ただし、この図書資料は、ビュフォンの著作というよりは、その著作にもとづいた博物画家シャルル・ドルビーニ(Charles d'Orbigny, 1806 - 1876)による『博物学万有事典』(Dictionnaire universel d'histoire naturelle)であり<sup>20</sup>、1929年に地質学教室で購入されたものである。彩色の銅版画が多数収載されている(写真4)。

17 Stephen Hales, Vegetable staticks, or, an account of some statical experiments on the sap in vegetables: being an essay towards a natural history of vegetation: also, a specimen of an attempt to analyse the air, by a great variety of chymio-statical experiments; which were read at several meetings before the Royal Society, London, 1727. 請求記号 C5/155 受入 1944/11/27 登録番号 136169

18 この頃、古生物学講座の松本彦七郎は、1933年(昭和8)に文官分限令により休職を命じられ、1935年に休職満期により退官となった。

19 小川知幸「リンネとビュフォンその1・その2」『東北大学総合学術博物館ニュースレター Omnivids [オムニヴィデンス]』

No. 31, 2009年, 2 - 5頁, No. 33, 2009年, 2 - 4頁

20 Charles d'Orbigny, Dictionnaire universel d'histoire naturelle: résumant et complétant tous les faits présentés par les encyclopédies, les anciens dictionnaires scientifiques, les Oeuvres complètes de Buffon, et les meilleurs traités spéciaux sur les diverses branches des sciences naturelles; donnant la description des êtres et des divers phénomènes de la nature, l'étymologie et la définition des noms scientifiques, et les principales applications des corps organiques et inorganiques à l'agriculture, à la médecine, aux arts industriels, etc., Paris, 1847-1849. 請求記号 412/1-16 受入 1929/4/6 登録番号 68394-68409



表 3. 著名な研究者による著書等の刊年

教室等	著者等 (生没年)	刊年(冊数)
数学	ヤコビ、カール・グスタフ・ヤコブ (1804-1851)	1825
物理	ドルトン、ジョン (1766-1844)	1802
	ファラデー、マイケル (1791-1867)	1839, 1844, 1845
	ヒューウェル、ウィリアム (1794-1866)	1847(3)
化学	ファラデー、マイケル (1791-1867)	1839, 1842, 1844, 1845
地質	ビュフォン、ジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド (1707-1788)	1842, 1844(6), 1845, 1849(4)
	ラマルク、ジャン＝バティスト (1744-1829)	1826, 1836
	キュヴィエ、ジョルジュ (1769-1832)	1834(12)
	フンボルト、アレクサンダー・フォン (1769-1859)	1833, 1843(3)
	ブランヴィル、アンリ (1777-1850)	1825, 1827
	マンテル、ギデオン (1790-1852)	1839(2)
	ライエル、チャールズ (1797-1875)	1830-1833(3)
	アガシ、ルイ (1807-1873)	1840
生物	レイ、ジョン (1627-1705)	1846, 1848
	ヘールズ、ステイーブン (1677-1761)	1727
	リンネ、カール・フォン (1707-1778)	1737, 1755, 1792, 1797-1810(8), 1825(5), 1826(2), 1828, 1831, 1833
	ツンベルク、カール・ペーテル (1743-1828)	1784
	ドゥ・カンドール、オーギュスタン・ピラミュ (1778-1841)	1824(20), 1825, 1828(2), 1835
	アガシ、ルイ (1807-1873)	1848, 1852, 1854
	ダーウィン、チャールズ (1809-1882)	1851, 1854
天文	ケプラー、ヨハネス (1571-1630)	1804
	ハリー、エドモンド (1656-1742)	1752
	ラグランジュ、ジョゼフ＝ルイ (1736-1813)	1776, 1781
	ラプラス、ピエール＝シモン (1749-1827)	1843(7)
	エアリー、ジョージ・ビドル (1801-1892)	1842(2)
科学概論	ヒューウェル、ウィリアム (1794-1866)	1847(3)
集密大型	ルンフィウス、ゲオルク (1627-1702)	1741
	マンテル、ギデオン (1790-1852)	1822
	アガシ、ルイ (1807-1873)	1833(10)

リンネについては『ラップランド植物誌』(Flora Lapponica) (写真5)<sup>21</sup>, 『スウェーデン植物誌』(Flora Svecica), 『植物の体系』(Systema Vegetabilium) 6巻, 『植物の種』(Species Plantarum) 9巻などが所蔵されている<sup>22</sup>。リンネは植物の性体系から分類法を発想し、これを学名の二名法へと発展させたといわれるが、この『植物の種』における記載は現在でも植物の学名の基礎となっている。性体系による分類をリンネは、自然を創造した神の意志にかなうものと信じていた。しかし、リンネの生

前のうちに、諸大陸から陸続と送り届けられた標本の集積により、当初の想像を遥かにこえる生物多様性が明らかになった。博物学はその臨界に達し、自然科学の専門分化が始まった。

リンネの分類法も自然というよりは人工的なものと見做されるようになり、それに代えて、植物の単一の形質から細分するのではなく、複数の形質そして器官などの特徴から客観的に分類する「自然分類法」が広く採用されることになった<sup>23</sup>。

21 1737年初版および1792年改訂版。改訂版は植物学者でありロンドン・リンネ協会初代会長であったジェームズ・エドワード・スミスによる。

22 Caroli Linnaei Flora lapponica exhibens plantas per Lapponiam, Amstelaedami, 1737. 請求記号 C7/285/1 受入 1954/10/5 登録番号 161333; Caroli Linnaei Flora Lapponica exhibens plantas per Lapponiam, edited by James Edward Smith, Londini, 1792. 請求記号 C7/285/2 受入 1955/9/20 登録番号 167105; Caroli Linnaei Flora Svecica exhibens plantas per regnum Sveciae crescentes. Editio secunda, aucta et emendata, Stockholmiae, 1755. 請求記号 C12/130 受入 1962/3/13 登録番号 224561; Flora svecica enumerans plantas Sveciae indigenas post Linnaeum edita a Georgio Wahlenberg,

Upsaliae, 1831-1833. 2 Vols. 請求記号 C12/99/1 受入 1955/6/14 登録番号 165387, 165388; Systema Vegetabilium, Editio decima sexta, Gottingae, 1825-1828. 6 Vols. 請求記号 C12/129-1-/129-6 受入 1962/3/13 登録番号 224572-224577; Caroli a Linné Species plantarum exhibentes plantas rite cognitatas. Ad genera relatas. Cum differentiis specificis, nominibus trivialibus, synonymis selectis, locis natalibus, secundum systema sexuale digestas, 4th ed. Berolini, 1797-1810. 請求記号 C12/131-1-/9 受入 1962/3/13 登録番号 224562-224571

23 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本 下』紀伊國屋書店, 1999年, 411頁以下参照。

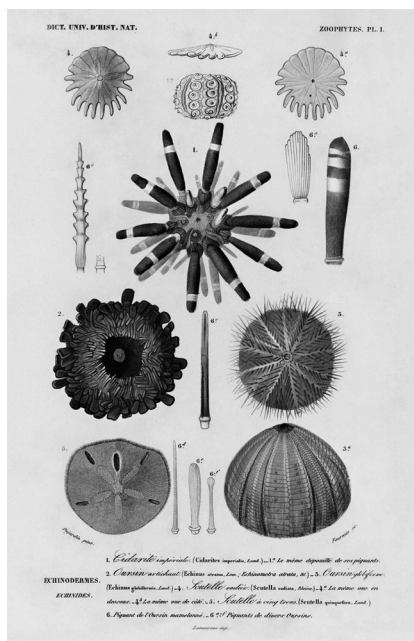


写真 4. ドルビーニ『博物学万有事典』

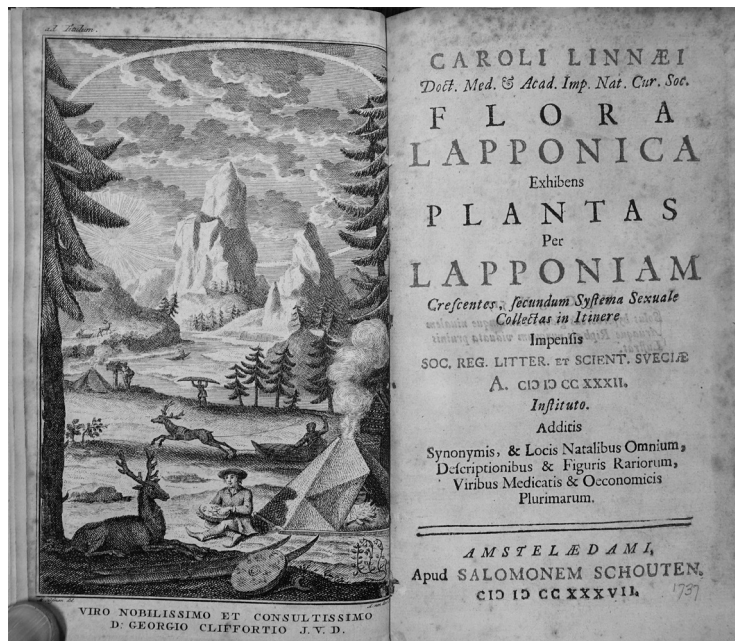


写真 5. リンネ『ラップランド植物誌』

そのような分類法により植物界の体系化をめざしたのが、ドゥ・カンドールの『植物界の自然分類序説』(Prodromus Systematis Naturalis Regni Vegetabilis)であり、全21巻が所蔵されている<sup>24</sup>。ちなみにドゥ・カンドールは、オーギュスタン、アルフォンス、カシミールと三代続く学者の家系にあり、これは初代にあたるオーギュスタンの業績である。だが、その仕事は二代目のアルフォンスに引き継がれ、1873年まで刊行された。本文がラテン語であるためか、かれの分類法にかんするドイツ語訳が他に4冊所蔵されている。

ドゥ・カンドールのキャリアの始まりは、初期の仕事がジョルジュ・キュヴィエやジャン＝バティスト・ラマルクに注目され、1802年にコレージュ・ド・フランスでの職を得たことからであった。他方、この年にパリ植物園の正教授となったキュヴィエ(Georges Cuvier, 1769－1832)は比較解剖学の権威であり、『骨化石研究』

12巻が地質学教室の購入分として収められていたことは上記の通りである。キュヴィエは、パリ植物園の展示室に16万6千点あまりの動物標本を展示し、そこに招かれたリチャード・オーウェンが、後にこれを模範としてつくった施設が現在のロンドン自然史博物館(大英博物館自然史分館)の基礎となった<sup>25</sup>。その後キュヴィエの後を継いでパリ植物園の比較解剖学教授となったのが、ブランヴィル(Henri Marie Ducrotay de Blainville, 1777－1850)であった。オーウェンからブランヴィルに宛てた自筆の献辞のある別刷りが収められていたのも地質学教室旧蔵書のなかであった(本館の貴重図書に指定済み)。ブランヴィルについては他に『軟体動物学及貝類学手引』2冊が所蔵されている<sup>26</sup>。

ところで、ダーウィンがビーグル号での航海にライエル(Charles Lyell, 1797－1875)の『地質学原理』第1巻を携えていったことはよく知られている。矢部文庫

24 Aug. Pyramo de Candolle, Prodromus Systematis Naturalis Regni Vegetabilis, sive enumeratio contracta ordinum generum specierumque plantarum huc usque cognitarum, juxta methodi naturalis normas digesta, Parisii, 1824-1873. 請求記号 C8/141-1/-141-21 受入 1929/5/17 登録番号 66972-66991

25 小川, 上掲論文「東北大学附属図書館で発見されたオーウェン自筆本について」1－3頁参照。ところで、拙論8頁註30において筆者は、その排架記号にかんして「カード体目録には『VIII/G8』と分類されたものが見つかっているが活用されなかったとおもわれる。Gの意味も不明である」としたが、東北帝国大学附属図書館の分類法(いわゆる旧片平分類)では

VIIIは理学, Gは地質学を指す(ABC順でありGeologyのGではない)。ご助言をいただいた東北大学附属図書館元職員の方の今泉みはる氏には記してお礼申し上げる。ただし、細目ではG1からG7までは存在するものの、G8に分類された図書資料は他に見つけることができなかった。おそらく学科図書室から配置換えする計画があったが撤回されたのではないかとすれば、同書はすでにその性格からそのまま図書室のなかで保管するのがよいと認識されていたと考えられるだろう。

26 H. M. Ducrotay de Blainville, Manuel de malacologie et de conchyliologie, Paris, 1825-1827. 請求記号 地質/66/1, 66/2, 受入 1922/5/8 登録番号 29488, 28489

(もとは矢部長克の私文庫)に由来する地質学教室旧蔵書のライエルもこれであった(全3巻, 初版)<sup>27</sup>。他方, ダーウィンの著作については生物学教室旧蔵書に「フジツボ」にかんするモノグラフが2冊ある<sup>28</sup>。それらは1851年と1854年に刊行され, 直後に『種の起源』(1859年)が刊行されたことから, この研究についてはさまざまな議論があり<sup>29</sup>, その行方も含めて興味は尽きない。

地質学と生物など, 複数の教室にまたがって所蔵されているルイ・アガシ (Jean Louis Rodolphe Agassiz, 1807 – 1873) については, 主著『魚化石の研究』(Recherches sur les poissons fossiles)全10巻が集密大型本に, 『動物学・地質学文献目録』(Bibliographia zoologiae et geologiae)が生物学教室旧蔵書に, そして『棘皮動物研究: 現生と化石』(Monographies d'échinodermes, vivans et fossiles)などが地質学教室旧蔵書にある<sup>30</sup>。とくに魚類の研究で知られるアガシは, 若い頃キュヴィエと共同研究を始めたが, その後渡米し, その地に骨をうずめた。比較解剖学と発生学, そして地質学の3者の関係を追究し, ダーウィンの進化論には終生異論を唱えたといわれるが, 生物多様性を独自に説明しようとしたという。広く分野をこえた研究者であった。

不遇の素人研究者ギデオン・マンテル (Gideon Algernon Mantell, 1790 – 1852) についてはもはや多言を要さないだろう。言わずと知れたイグアノドンの歯の発見者であるが, キュヴィエもオーウェンも当初それを哺乳類のものと主張して譲らなかった。所蔵され

ているのは処女作にして出世作『サウスダウンズの化石』(The fossils of the south downs), および後年の『地質学の驚異』(The Wonders of Geology)第3版全2巻である(写真6)<sup>31</sup>。ともに矢部文庫に由来する。

ジェイムズ・ハットン, ウィリアム・スミス, ウィリアム・バックランドのような近代地質学の創始・発展者たちの著作は収められていないが, ここではリンネ, ビュフォンに結実する啓蒙主義の時代の博物学の成果に始まり, キュヴィエやアガシなど, とくにその生物学, 古生物学の記載や描写を重視した陣容になっているようにおもわれる。リンネの「使徒」の一人であったツンベルク (トウンベリとも, Carl Peter Thunberg, 1743 – 1828) の著書『日本植物誌』(Flora Japonica)が所蔵されていることも(写真7), おそらくはそのような流れのなかにあるのだろう<sup>32</sup>。これは1963年(昭和38)に購入されており, その意味では, 戦後になっても研究室の伝統は連綿と受け継がれていたのである。

また, わが国では名著『ロウソクの科学』によってつとに知られているマイケル・ファラデー (Michael Faraday, 1791 – 1867) については<sup>33</sup>, 主著『電気実験』が物理および化学教室旧蔵書に重複して収められている。他方あまり知られていないものの, ファラデーの『化学実験の進め方』という著書も所蔵されており, それらはいずれも1911年の創設時の購入分であった<sup>34</sup>。

ということは, ファラデーの主著は物理学教室でも化学教室でも研究の基礎設備の一つであり, いわば実践のための教科書と認識されていたのではないだろうか。

27 Charles Lyell, Principles of Geology, being an attempt to explain the former changes of the Earth's surface, by reference to causes now in operation, London, 1830-1833. 3 Vols. 請求記号 矢部文庫 /L/16-/18 標題紙の書き込みにより 1922/10/9 に購入されたと推定される。

28 Charles Darwin, The Lepadidae; or, pedunculated cirripedes, London, 1851. 請求記号 B15/70/16 受入 1924/6/30 登録番号 39313 ; The balanidae; (or sessile cirripedes); the verrucidae, etc., etc., London, 1854. 請求記号 B15/70/17 受入 1924/6/30 登録番号 39314

29 進化論の着想から『種の起源』刊行まで約20年の「ブランク」があることを“Darwin's delay”とか“the long wait”などと呼ぶことがある。「フジツボ」の研究がその「遅れ」の原因の一端となった, とする見解がある。

30 Recherches sur les poissons fossiles par L. Agassiz, Aux frais de l'auteur, Lithographie de H. Nicolet, Neuchâtel, 1833-1843. 請求記号 AGA/1-1-/10 受入 1922/5/8 登録番号 29474-29483; Bibliographia Zoologiae et Geologiae. A general catalogue of all books, tracts, and memoirs on zoology and geology, Louis Agassiz, corrected, enlarged, and edited by H.E. Strickland, London, 1848-1854. 4 Vols. (Vol.1 は所蔵なし) 請求記号 B15/70/10-/12 受入 1924/6/30 登録番号 39274-39276; Monographies d'échinodermes, vivans et fossils, Auteur, 1838-1842. 5 Vols. in 1. 請求記号 a/18 受入 1925/3/31 登録番号 41914; Études critiques sur les mollusques fossils, Neuchâtel, 1840-1845. 請求記号 a/21 受入 1925/3/31 登録

番号 41912

31 Gideon Mantell, The fossils of the south downs; or illustration of the geology of Sussex, London, 1822. 請求記号 矢部文庫 /M/19 受入 1925/7/30 登録番号不明; The wonders of geology or a familiar exposition of geological phenomena, 3rd ed., London, 1839, 2 Vols. 請求記号 矢部文庫 /M/18-1-/2 受入 1915/9/24 登録番号不明

32 Caroli Petri Thunberg, Flora Iaponica, sistens plantas insularum iaponicarum secundum systema sexuale emendatum redactas ad XX classes, ordines, genera et species cum differentiis specificis, synonymis paucis, descriptionibus concinnis et XXXIX iconibus adiectis, Lipsiae, 1784. 請求記号 C7/107 受入 1963/3/22 登録番号 239386

33 原著タイトルは The Chemical History of a Candle であり, 「(ありふれた灯りである) ロウソクからでもわかる化学の話」というほどの意味。

34 Michael Faraday, Experimental researches in electricity, London, 1839-1855. 3 Vols. 請求記号 物理 /656, 657, 6.2/F/5 受入 1911/7/10 登録番号 1639-1641, 化学教室旧蔵書では請求記号 XVI/5/1-/3 受入 1911/10/2 登録番号 7239-7241; Chemical manipulation being instructions to students in chemistry on the methods of performing experiments of demonstration or research, with accuracy and success, 3rd ed., rev., London, 1842. 請求記号 II/10 受入不明 登録番号 21751 (受入年は不明だが登録番号から 1920 年より前と推定される)





写真6. マンテル『地質学の驚異』より口絵

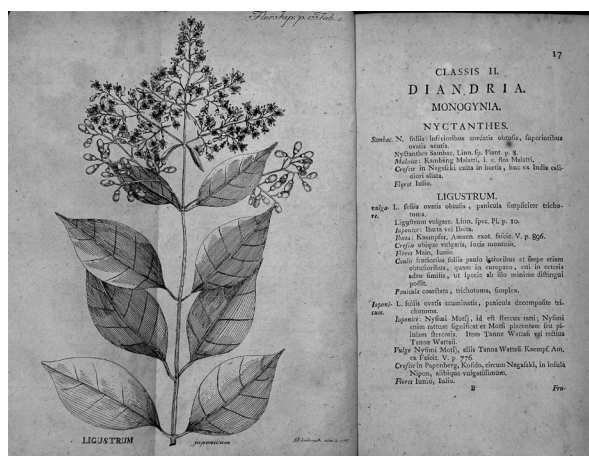


写真7. ツンベルク『日本植物誌』

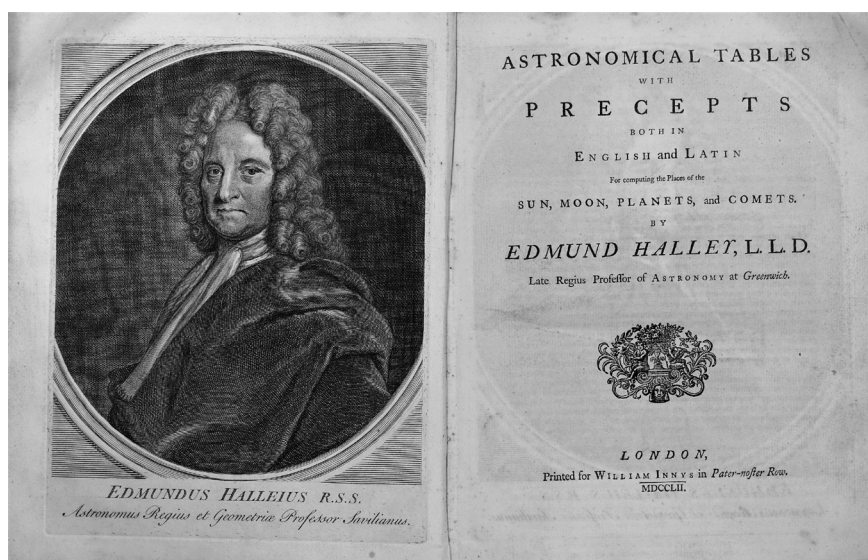


写真8. ハリー『天測暦と運行則』



さらに、サイエンティスト (Scientist) ということばを作った科学者・科学哲学者として知られるヒューウェル (William Whewell, 1794 – 1866) の主著『帰納諸科学の歴史』および『帰納諸科学の哲学』が物理学教室旧蔵書と科学概論にも収められている<sup>35</sup>。科学的な説明とは何か、という問題をめぐるものであり<sup>36</sup>、そのような基礎的な研究テーマにもやはり関心を抱いていたということであろう。

天文学教室旧蔵書では、先にも触れたエドモンド・ハリーの『天測暦と運行則』が収められている(前頁写真8)<sup>37</sup>。つぎに刊年が早いのは、『解析力学』によりニュートン力学を再定式化した18世紀最大の数学者の一人であるラグランジュ (Joseph-Louis Lagrange, 1736 – 1813) の『1774年フランス科学アカデミー物理天文学賞：月の永年方程式』である<sup>38</sup>。同書は1773年刊行の『論集』(Mémoires) から受賞後の1776年に別刷りされたものであるが、具体的には、地球と月のような、二つの天体の重力が釣り合う地点 (= 軌道上の平衡点) においてわずかに揺れ動く(ように見える)現象 (= 秤動 libration) について論じられ、そのような平衡点は、後にラグランジュ点 (Lagrangian point) と称されるようになった。

ラグランジュについては、他にも講義録の手稿の写しのようなものが収められている(写真9)<sup>39</sup>。おそらく1781年の講義にかかる内容が記されていると考えられるが詳細は不明である。受入れはこちらのほうが早い。さらに、フランスの数学者・天文学者ラプラス (Pierre-Simon Laplace, 1749 – 1827) の著作集全7巻が収められており、主著「天体力学概論」(traité intitulé Mécanique Céleste) 5巻、「確立の解析的理論」1巻 (Théorie analytique des probabilités) もこの著作集に収載されてい

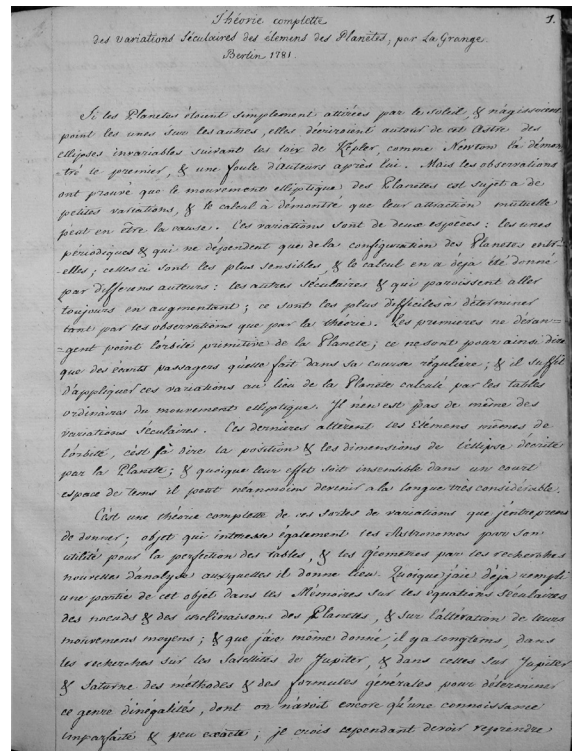


写真9. ラグランジュ講義録(?) 手稿

る<sup>40</sup>。ラプラスは、ニュートンがなしえなかった惑星運動の不規則性を確率論から解析し、太陽系の安定性を証明したことで知られる。

すでに述べたように、16, 17世紀のガリレオ、ニュートンなどは物理学教室旧蔵書の「貴重書」に所蔵されているので、ここではかれらに続くハリー、ラグランジュ、ラプラスのような、18世紀天文学のきら星のごとき学者の著作が揃えられていることがわかる。

ところで、上記のラグランジュの手稿のように、ハリーの著作にも、書簡のようなものが添付されてい

35 William Whewell, The philosophy of the inductive sciences, founded upon their history, New ed., London, 1847. 2 Vols. 請求記号 物理 /204, 205 受入 1917/6/16 登録番号 15478, 15479; History of the inductive sciences from the earliest to the present time, 2nd ed., London, 1847. 3 Vols. 請求記号 M37/8 受入 1917/6/16 登録番号 15475-15477 サイエンティストということばについても、この『帰納諸科学の哲学』においてつぎのように提唱されている。「物理学の実践者に対しフィジシャンということばを使うことができぬように、私はこれをフィジシストと称する。科学一般の実践者を説明するための最適な名称が必要である。私はこれをサイエンティストと呼びたい。例えばミュージシャン、ペインター、ポエト (詩人) はアーティストと言うだろう。そのように、マテマティシャンや、フィジシストや、ナチュラリストはサイエンティストなのである。As we cannot use physician for a cultivator of physics, I have called him a physicist. We need very much a name to describe a cultivator of science in general. I should incline to call him a Scientist. Thus we might say, that as an Artist is a Musician, Painter, or Poet, a Scientist is a Mathematician, Physicist, or Naturalist.」一例を挙げればヒストリアンやライ

ブラリアンのように、接尾辞 -ian は広く全体を見渡すものだが、それに対し -ist は音楽家のような特定の道具立てによる実践者であり、サイエンスではそれが適切な呼び名であるという主張は、当然反発を受けた。だが、18世紀半ばに自然哲学 (Natural Philosophy) は、本格的に専門分化した自然科学 (Natural Science) からはもはや後戻りできないところまで来ていたのだろう。(分科+学=科学)

36 ヒューウェルの考え方については、内井惣七「十九世紀イギリスにおける『科学的説明』の分析」日本科学哲学会編『科学的説明 (科学哲学 26)』1993年、67 – 77頁、とくに72頁以降参照。

37 註16を参照のこと。

38 Joseph-Louis Lagrange, Prix d'Astronomie physique sur l'équation séculaire de la Lune, Paris, [1776]. 請求記号 L/A/2 受入 1940/11/12 登録番号 123170

39 Mem. de B. Mss / Lagrange. [s.n.], [1781]. (various pagings) 請求記号 L/A/1 受入 1925/12/7 登録番号 45279

40 Pierre Simon Laplace, Oeuvres de Laplace, Paris, 1843-1847. 請求記号 L/A/7(1)-(7) 受入 1925/12/7 登録番号 45105-45111

る。他にも、パウル・ハルツァー (Paul Harzer, 1857 – 1932) の署名のある『Himmliche Mechanik』(天体力学)と題された手書き文字の(おそらく印刷)冊子体が収められている(写真10)。著者標目にはBrunsとあるが、ブルンス(Karl Christian Bruhns, 1830 – 1881)の誤りであろう<sup>41</sup>。ブルンスはドイツの天文学者でありライプツィヒ天文台長であった。その8名の弟子のうちの一人(末弟)がハルツァーであり<sup>42</sup>、ブルンスは1878年にハルツァーの学位論文を受理している<sup>43</sup>。そこから推測すれば、この資料はハルツァーの手により編まれたブルンスの講義録ではないだろうか(②資料的価値)。ハルツァーは、アインシュタインと特殊相対性理論をめぐる議論したことでも知られる<sup>44</sup>。

このように、コレクションの図書資料は、たんに古典の探究にとどまらず、学問の系譜上、要所において17世紀から18世紀、19世紀、そして現代へとつながっており、その科学史的価値は十分に示されているといえる。また、それ以外にも、旧蔵者の自筆献辞や蔵書票などにより、入手先をうかがい知ることのできる資料もいくつか見受けられるため<sup>45</sup>、筆者はそうしたもののについても、刊年にこだわることなく候補として残しておいた。

以上では重要とおもわれる資料の一部のみを摘記したが、今後、適切な保存環境のもとで閲覧の機会を確保すれば、さまざまな観点による調査研究のなかで、オーウェンのような著名な人物による書き込み等を再発見したり、研究者間の交流などの新たな側面が明らかになったりする可能性もあるだろう。

#### 4. おわりに

最後に、附属図書館北青葉山分館の書架より抽出し、「理科大学コレクション」(仮称)として選定した図書資料290冊について、これまでに判明したことを簡単にまとめておきたい。

まず、現在本館において進行中である1850年までの刊年の図書資料の一括排架計画とあわせて、これを刊

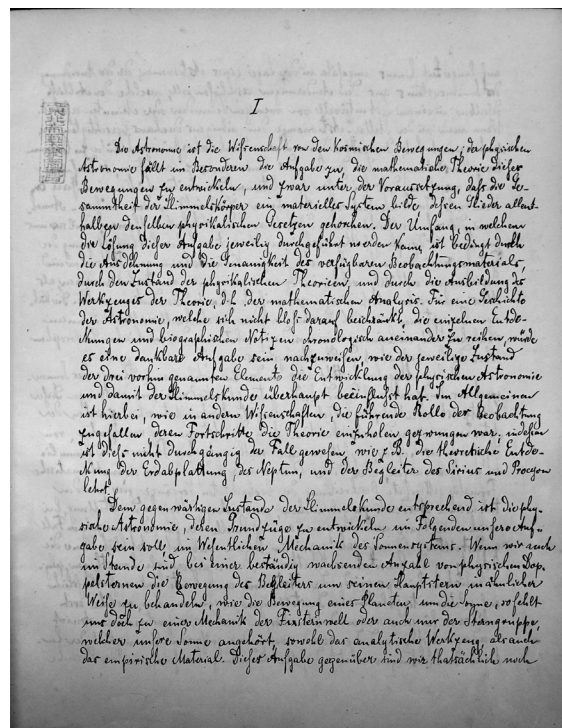


写真10. ブルンス「天体力学」講義録

行年代のいちおうの基準としたが、シリーズやそれ以外の資料的・物理的な特徴が見られるものを顧慮し、概ね19世紀までの範囲を心がけながら選定した。

それらの図書資料は、とくに理科大学創設時の数学、物理、化学、地質の4教室、そして学部制移行後の生物、天文の各教室において購入されたものであった。18世紀の図書資料は23冊あり、もっとも早い刊行年の図書資料は1727年であった。一方で、もっとも遅いものは1893年であった。1840年代の106冊が最大値であり、1850年以後でも27冊あった。

地質、生物の教室旧蔵書がとくに多いものの(2教室で約55パーセント)、物理ではすでに特別閲覧室に排架された「貴重書」があり、数学では本館に移管済みの和算関係資料があることから、単純にもとの割合を算定することは適当とはおもわれない。

受入年と比較すると、理科大学創設時に56冊(約20パーセント)が、続いて太平洋戦争終結時までに173

41 Bruns [Bruhns, Karl Christian]; [Paul Harzer], Himmliche Mechanik, [s.l.], [18?]? 請求記号 B/R/26 受入 1940/11/12 登録番号 123186

42 Karl Stumpf: Harzer, Paul Hermann. In: Neue Deutsche Biographie. Bd. 8, Berlin 1969, p. 17.

43 ノースダコタ州立大学 Mathematics Genealogy Project (<https://www.genealogy.math.ndsu.nodak.edu/id.php?id=65029>) 参照 (2020年12月閲覧)

44 The Collected Papers of Albert Einstein: Vol.6: The Berlin Years:

Writings, 1914-1917, Doc.4, Doc.6. (<https://einsteinpapers.press.princeton.edu/vol6-trans/>) (2020年12月閲覧)

45 一例として、F.G.W. Struve, Études d'astronomie stellaire sur la voie lactée et sur la distance des étoiles fixes, St. Pétersbourg, 1847には見返し紙に著者自筆の献辞が見られる。「シュトルーヴェの測地弧」で知られるロシア出身の天文学者シュトルーヴェ(Friedrich Georg Wilhelm von Struve, 1793 – 1864)である。請求記号 S/T/11 受入(推定) 1925/12/7 登録番号 45289

冊(約60パーセント)が購入されていた。残り約20パーセントは戦後の購入分であった。

時期的にみれば、理科大学の創設および理学部への改組と学科拡充という事象が、また後者にあつてはインフレーションによる大学予算の増額も追い風になったと考えられるが、1911年の創設時から1920年代までは、おもに1820年代以降の図書資料を、その後の1925年代以降には、それらよりも早い年代のものを加えて購入する傾向があることから、当初より、最新の研究成果だけでなく、それぞれの研究分野の基礎資料とそれらを形づくる古典資料を併せて探究しようという教室の「伝統」の存在をうかがわせるものであった。それは戦中・戦後においても、全体として縮小したとはいえ、時に大きく息を吹き返ししながら、受け継がれていったようである。

科学史的観点から言えば、リンネ、また、ビュフォンの業績にもとづいたドルビーニ、そしてドウ・カンドール、キュヴィエのシリーズが多く集められており、自然の体系化に向けて尽力した18世紀啓蒙主義時代の成果を俯瞰することができる。19世紀ではマンテル、アガシ、ライエル、そしてダーウィンにより、現代までつながる地質・古生物学の系譜を読み取ることができるだろう。ヒューウェルとファラデーは、科学の根幹や実践を問うものであり、ハリー、ラグランジュ、そしてラプラスは、天体力学の古典的基礎を形づくるものであろう。この辺りはおそらく、ガリレオやニュートンを擁する物理学教室旧蔵書の「貴重書」によって補完されるものと予想する。

ハリー以下の天文学関係では、特殊な資料としての稀少性も重要となる。添付された書簡や、手稿、手書きの講義録などである。他にもコレクション全体にわ

たって書き入れや蔵書票などが多数含まれており、今後の調査の進展が俟たれる。

本稿で分析した「理科大学コレクション」(仮称)は、290冊という小さな集書ながら、旧教室ごとの動向に局限されることなく、いわば歴史の地層の切片として、科学史や東北帝国大学における研究の志向、その歩みを明確に析出できるものであった。保存環境と目録を整備して一括排架することで、研究教育のための利活用をうながすことができるのではないだろうか<sup>46</sup>。

筆者はこのコレクションをその価値にかんがみて、「理科大学」の名称のもとに取り扱うのが相応しいと考える。

Summary: A collection of the College of Science of Tohoku Imperial University, called tentatively in Kita-Aobayama Library, includes the former book-collections of the four departments of mathematics, physics, geology and chemistry, and of the two departments of biology and astronomy. Its trend of the collection suggests the tradition, that considers European classical literatures as the basic facilities for academic researches, and for the basis of the discipline of natural science. This tradition is believed to be a characteristic since its foundation, and inherited during and after the World War II. The collection includes works by Linnaeus, d'Orbigny, de Candolle, Cuvier, Agassiz, Lyell, Darwin, Halley, Lagrange and Laplace, etc. In addition, there are also manuscripts, letters and the autographs of famous scholars.

(おがわ ともゆき, 学術資源研究公開センター・  
総合学術博物館助教 附属図書館調査研究室員・  
協力研究員)

46 本稿脱稿後、理学部地質図書室より、矢部文庫の蔵書はまだその一部が同図書室に残されているとの一報があった。1982年(昭和57)には、予め選別した図書資料を移管し、1995年(平成7)、2000年(平成12)にさらに一部を段階的に移管したが、なお相当数を同図書室にて管理しているとの由である。その他にも同図書室には半沢文庫(半沢正四郎)、浅野文庫(浅野清)、畑井文庫(畑井小虎)等の蔵書が保管されているという。

いずれも研究教育上の基準により、そのつど選別されたと考えられるが、今後は図書館における保存・活用にさいしての基準との調整も必要であろう。「理科大学コレクション」の第2フェイズでの選定を期して、後日、調査に臨みたい。上記の文庫については、小笠原憲四郎「研究室めぐり：東北大学理学部地質学古生物学教室」日本古生物学会『化石』42(1987), 21-24頁参照のこと。